



# RIKKYO SECOND STAGE

## Contents

- P1 立教セカンドステージ大学の設立  
 P2.3 受講生の横顔・入学式の感想  
 P4.5 ゼミナールの紹介 P6.7 話題の授業  
 P8 立教キャンパス探訪・ラウンジ風景

「立教セカンドステージ大学」は立教大学が提供する生涯学習の場です。シニア層の学び直しと再チャレンジをサポートします。



発行：立教大学 「立教セカンドステージ大学」  
 編集責任：笠原清志 編集長：岡崎曠敬  
 発行日：2008年9月15日  
 〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1



## 立教セカンドステージ大学の設立

立教セカンドステージ大学  
副学長 笠原 清志



立教大学は、「キリスト教に基づく陶冶」を建学の精神として、社会に開かれた教学、研究の場として社会の変化に応じて自己革新をはかってきました。すでに、学部および大学院への社会人入試を先駆的に導入し、さらに近年では高度職業人の養成や専門職資格を取得するために、独立研究科や法務研究科を創設して門戸を開いてきました。加えて、大学としては独立研究科設立の際に「少子化・高齢化社会の将来を展望し、充実した市民社会形成のための人類の知恵を磨く場」としての専攻の設置を掲げました。

これまでの経緯と実績をもとに、社会人、とりわけ急増しつつある団塊世代を中心とするシニア層に対して、質の高い教養教育と多面的な学びの場を提供し、社会と大学のネットワークの輪を一層広げることが、これからの時代における大学の社会的責務であると考え、このたび新たに「立教セカンドステージ大学」を設立しました。

立教セカンドステージ大学は、シニア世代の「学び直し」と「再チャレンジ」をサポートする生涯学習プログラムです。社会経験の豊かなシニア世代の

個人的な学びの行為が社会的な実践ともなりえるような、知の回路を発見する場を受講生とともに創っていくことを目的にしています。

立教セカンドステージ大学の研究教育活動は、大きく三つの科目群に分かれています。まず一つ目に、助け合う新しい人間関係の中で自分らしいライフスタイルを編み出し、地域社会や家族とのつながりを取り戻す「エイジング社会の教養科目群」(12科目)。二つ目に、21世紀の新しい公共性を担うNPO・NGO活動の実践的講座と、セカンドステージの生き方を学び、新たな仕事にチャレンジする「コミュニティデザインとビジネス科目群」(10科目)。そして三つ目に、真に主体的な市民として生きていくための新しい自己や人間関係を創り出す知識や技量を身に付ける「セカンドステージ設計科目群」(10科目)があります。さらにそれに加え、通年の「ゼミナール」があり、体系的な学びの場が用意されています。

今年4月の開校以来、受講生の学びの情熱と真摯な姿勢、校友意識を醸成するエネルギーに圧倒され、そして感動しています。

この本科1年を通じた学び直しと再チャレンジの場で、社会とつながる新たなネットワークが形成されることを大きく期待しています。

## 受講生の横顔

### 自分のためだけの時間を有効活用したい

～仲間との出会い・学ぶのが楽しい～

立教セカンドステージ大学の第1期生がどんな動機で入学を決意し、どんな状況（属性）で通学をしているのかの実態を知るために、入学者96名に対してアンケートを実施し、83名から回答を得ました。以下、回答結果をもとに、入学者の実像や入学動機、入学後の感想などを報告します。

#### 団塊の世代が主力メンバー

年齢別では、団塊の世代の60～64歳が最も多く、次いで55～59歳、65～69歳、50～54歳の順。55～64歳が全体の8割を占めているのが大きな特徴といえます。70歳以上は3名ですが、素晴らしいことに最高齢者は80歳を超えています。男女比は男性52%、女性48%です。

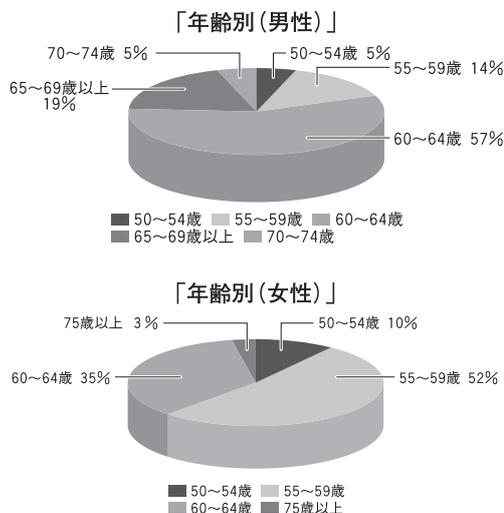
男女別では、男性が各世代に散らばっているのに対して、女性は50～64歳にほぼ集中、なかでも55～59歳が最も多く、女性は定年前の段階で、セカンドステージに踏み切った人が多かったようです。（グラフー1）

#### 職業は会社員、役員、主婦、自営、公務員の順

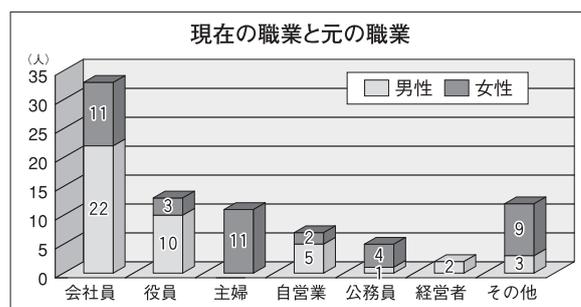
現在の職業または元の職業を尋ねたところ、男女とも会社員が最も多く、次いで役員、主婦、自営業、公務員、経営者の順。その他では、教員とした人が3名いました。（グラフー2）

### 居住地域は首都圏がほとんど

住んでいる地域は、東京、神奈川、千葉、埼玉が9割強と圧倒的に多いですが、山梨、栃木、群馬、茨城、長野の各県から通学する熱心な人もいます。



(グラフー1)



(グラフー2)

## 入学式の感想



❖ チャペルでの厳粛な入学式はこれからの期待と入学の喜びを倍増するものでした。八木チャプレンによる「序祷」。大橋学長からの「お待ちしてました」という歓迎のお言葉。柳チャプレンの「聖書（愛について）」、小笠原チャプレン長の「建学の精神」について、それぞれのお話を聞きました。娘が立教女学院中学から立教大学卒業までの10年間で、大きく成長したことの理由が理解できるとともに、私自身も変化していけそうだという予

感がしました。

この恵まれた環境の中で、変わっていく自分を楽しみながらセカンドステージを充実したものにしていきたいという気持ちを持たた入学式でした。

関 守男

❖ 入学式はチャペルの厳かな中にも温かい雰囲気にも包まれた、すばらしいオルガン演奏の聖歌とともに新しい門出の日を忘れがたい時間にして下さいました。

また、学長はじめ北山先生、小笠原チャプレン長のお話も堅苦しいものではなく、「セカンドステージ大学という新しい試みを学生と協力しつつ作り上げていくのだ」という歓迎のお気持ちが溢れていて大変嬉しく、是非この試みに貢献したいという気持ちを強く持ちました。

マスコミや他の大学などからも注目されているとのことですが、日本の高度成長を支えてきた団塊シニア世代の知力とスキルは、混迷する日本の新しい進路を示す力になると思います。

長谷川 紀子



## 入学の動機と感想

### 入学の動機—キーワードは「次へのステップ」

- セカンドステージ大学という名の通り、今までの生活を見直し、現在自分が居る場所を再確認した上で次なる人生を考えるきっかけを見いだしたい人がほとんどでした。
- 男性は「定年後の時間」、女性は「子育ての終わった時間」、自分のためだけに使えるようになった時間の有効活用をこの大学に求めて来た人も多くいました。
- NPOやコミュニティビジネス、福祉など社会貢献していくために具体的に学びたいものがはっきりしている人も目立ちました。
- 「同世代の人となら大学という場所でも気後れせずに学べるのではないかと思った」という意見もあり、受験年齢の設定（50歳以上）も志望のきっかけになったようです。
- 「さらにレベルアップしていきたい」という動機を書いていた人も複数。「次のステップへの足がかりに」と考えている人もいて積極的な姿勢がうかがえます。

### 学んだ感想—「学ぶのが楽しい」

- ほとんどの人が「良かった」と答えています。具体的には「脳が活性化された」「今だからこそ学ぶのが楽しい」などです。そして「仲間との出会いがあったから」と答えていた人が多いです。
- 「本科が1年では短すぎる」という意見が複数ありました。卒業後も継続して仲間や大学とのつながりが持てるような場を望む声もあります。
- 「1期生として、新しい大学を先生と共に作っていくという気概を持っている」という意見が印象的でした。

❖ **小生**、今まで公立校だけで、私立ミッションスクールは初めての経験です。

入学式は十字架、スタンドグラス、パイプオルガンの演奏のなか、厳粛ですばらしい式であったと思います。聖書朗読、賛美歌を合唱し、キリスト教の一端に触れたような気がしましたし、「聖書と私」という科目が後期にあるので、ぜひ受けてみたいと思いました。

また、式後のオリエンテーションでは、担当教員の紹介があり、個性あふれた説明に先生たちの人間性を感じました。

平野 直行

❖ **初めて**教会での入学式に参列して、厳かな中にスタンドグラスの光が温かく私たちを包んでくれているような気持ちになる式だったと感じました。パイプオルガンの響きと賛美歌の中で、これから立教で学べる幸福を強く感じました。

あまり早すぎてはと、時間調整しながら到着したチャペルにはもう半分以上の方が着席しており、「改めて学ぶ

## 受講生にインタビュー

### 冬眠から目覚めたよう

上江洲 時子



私の入学の動機は立教大学の卒業後40周年記念の集いで大橋総長がおっしゃった「知の無いところは枯渇します」という言葉に深く共鳴したのがきっかけでした。入学後は冬眠から覚めたよう

で手探りしているうちに前期が過ぎていきました。けれどもこのような時間を現実には持ち得たことに感謝しております。そしてそれは同期の方達と学びの時を共有していくうちに、まるで大家族のような雰囲気の中で喜び・楽しみに変わりました。最近では社会問題への理解力が少しずつついてきたように思い、学ぶ科目は多様でも色々なことが有機的に繋がっていくのだと実感しております。

### 体系的に勉強ができ満足

椎橋 平吉



「定年後どうしようか」と考えていた時新聞で立教セカンドステージ大学の記事に出会ったのです。これまでNPOや町づくりは、市主催の生涯学習などで勉強してきましたが、大学の授業は大きく違いました。例えば幕の内弁当がフルコース料理に変わったという感覚でしょうか？

それぞれの科目が味わい深く、自分の考えも問われます。しかも、実際の事例を交えながら体系的な勉強ができました。印象に残っているのは、立花先生の「現代史の中の自分史」。自分を見直すチャンスになった上、憲法問題をはじめ、戦後史から宇宙論までのダイナミックな授業には圧倒されました。

ことにもっと積極的にならなければいけない」と、ここでもひとつ勉強できました。

午後からのガイダンスでは、先生方のお話がみんな楽しく、どれを受講しようか迷ってしまいました。

横内 まき子



## ゼミナールの紹介

### ゼミナールの特徴

立教セカンドステージ大学の大きな特徴の一つがゼミナールの存在です。受講生を単なる教育の対象として捉えるのではなく、「教員と社会経験豊かな受講生が共に学習プログラムを創っていく」という視点から、各ゼミナールが運営されています。

96名全ての受講生は、年間を通じて担当教員による7つのゼミナール（平均14名）のいずれかに必ず所属し、座学に加え合宿やフィールドスタディ、講演会開催などを通して主体的に学習します。そして最後に修了報告書をゼミ担当教員のサポートのもとまとめます。

### ゼミナールの選択方法

ゼミナールの選択方法にも特徴があります。まず、入学時に開催したオリエンテーションで、ゼミナールを担当する教員7名（右記参照）が、それぞれひとり5分程度自分の専門分野や授業内容とゼミナールの運営方針についてプレゼンテーションを行いました。

後日受講生が所属したいゼミを第一希望から第三希望まで提出するという方法をとりました。

### 研究テーマと修了報告書

ゼミナール開始後の活動は、適宜担当教員の専門分野について双方向の意見交換や研究テーマ（修了報告書のテーマ）を決めることに主眼を置きました。そして、ゼミナールごとの懇親も自主的に行うようにしました。

研究テーマは、本人の希望するものを自由に決めることができます。この研究テーマは年度末までに12,000字以上の論文にまとめて、修了報告書として提出することが義務付けられています。

### ゼミナール担当教員と専門分野

庄司 洋子	家族論・ジェンダー論
北山 晴一	社会デザイン論
笠原 清志	組織論
千石 英世	文芸批評
上田 恵介	動物生態学・環境論
佐野 淳也	NPO論・コミュニティデザイン論
坪野谷雅之	金融論・ビジネス起業論

今回は笠原ゼミ・庄司ゼミ・北山ゼミを紹介します。なお、残る4ゼミは次回（12月予定）紹介します。

## 笠原 ゼミ

### ●「出会い」の大切さ

まず、笠原ゼミのメンバーを紹介しましょう。立教出身の元「学生運動武闘派」（私には好々爺に感じられます）ある町の元町議「活動家」（町を少しでも活性化しようと思っている人）、学校の先生をしていた女性2名、セカンドステージ大学で最も遠い所から勉強に来ている人、写真に関するプロ・・・など様々です。男性10名、女性5名で船出をしました。もちろんスキッパー（船長）は笠原先生です。

### ● 授業内容は多種多彩

最初の授業は、先生が持参したビデオを見ての討論から始まりました。このことにより、意見が自然と出る雰囲気生まれ、何をしようかと不安だった私に安心感をもたらしてくれました。

1回目は、【福祉ビジネス】で、ヤマト運輸会長の奉仕の題材。援助概念の転換、すなわち困った人に金銭を与えるのではなく、得る方法、手段を教え、援助するビデオでした。目から鱗が落ちる思いでした。

2回目の、NHK（放映）【学級崩壊】では、随所に先生と生徒の不自然な関係が感じられ、不安感がわきました。それに対して笠原先生が、家庭のもつ社会化機能の

低下等が原因だとまとめてくれました。

3回目は、【宗教と現代—仏教】。ブッダ、孔子等の名前が出てきて大変興味がわきました。先生が黒板に「欲望—現実=不満(怒り)」の方程式を書いたとき、メンバー全員が興奮を覚えた一方で、「希望」ということを否定していると反論もおこり、議論の対象になりました。まだ、結論は宿題となっております。

### ● 修了報告書にむけて

現在は、先生より各自の研究レポートへの適切なアドバイスと指摘をいただいております。

この様に、ピンと張り詰めた中に適度な笑いと、意見の交換や提言の出る自由なゼミナールです。まだまだ熟していく、笠原ゼミに期待して下さい。（S）



笠原先生（前列中央）



## 庄司 ゼミ

### ● 各自の研究テーマ発表

総勢15名の庄司ゼミは、男性5名、女性10名の構成です。庄司先生は主に家族の形態や変容について研究されているということで、入学の動機として身近な問題や今後の暮らし方などを考えたいと思っていたゼミ生が集うことになりました。

さて、ゼミにおいてはまず1年間研究するテーマを決めなければなりません。前期庄司ゼミでは15名全員が各自のテーマを発表し終わりました。すでにテーマを絞りきれている人、まだまだ試行錯誤中の人などさまざまでした。作成したレジメに沿いながら1人20分程度の持ち時間内でテーマ決定に至る経緯を説明し、ゼミ生との質疑応答をすることは大変有意義な体験となりました。

なかにはゼミを体験するのが初めての人もおり、緊張する時間であったと思いますが、それこそが「学ぶ喜び」を実感するものであったに違いありません。

### ● 庄司先生の指導法

庄司先生は専門分野に限らず、ゼミ生の取り上げたテーマについて柔軟な指導をするという姿勢を示していただいているので、我々一同大いに安心しています。

一方、短いアドバイスの一言ひとことが的確で、厳し

さもそこにはあります。それだけ、真剣に向き合ってくださるので、感謝しています。

6月に行われた懇親会では初めて食事を共にして、それまで話す機会のなかった方とも話が弾みました。先生はお酒もなかなか強く、途中席を回られてゼミ生全員と親しくお話していただき、大変良い懇親会となりました。

### ● 学ぶのに遅すぎることはない

庄司ゼミでは夏休みに先生出席のもとサブゼミを開き後期も必要に応じて集中講義や個人指導も行われると思います。セカンドステージ大学の特色は、なんといても全員がゼミに所属し、1年間ひとつのテーマを探求するために文献を読み、資料を集め論文を書くことにあります。そういう時間を持つことがいかに幸せなことであるか。年齢を重ねても「学ぶのに遅すぎることはない」ということをゼミ生全員が実感しているのではないかと思います。(U)



庄司先生(前列左から4人目)



## 北山 ゼミ

～謎をかける教授vs謎解く受講生～



### ● 我々が北山晴一ゼミを紹介します

立教セカンドステージ大学全受講生が受ける必修科目「現代世界論」担当教授の北山先生のゼミです。

先生のキャラクターは、皆様が良くご存知?なので詳細は省きますが、東大文学部フランス語フランス文学及び同大学院仏語仏文学修了の英才で、今回の開校に当たり大きな貢献をされました。

ご実家はお寺で、しかも、10いくつある宗派の中でも数的にマイナーな方だと、オリエンテーション時に自己紹介をされていました。未だにその宗派は不明ですが、何故、仏教徒が立教の教授に?その疑問は無用です。生徒の大多数はクリスチャンではないのですから。

ゼミ授業内容は〈謎をかけて、真理に迫る〉難解な「現代世界論」とは打って変わり、解かり易く生徒一同ホットしております。やはり君子は豹変するのですね～。

そして、時々お得意の食文化や、ファッションの話題に触れ、我々を楽しませてくださいます。

### ● さて、13名の生徒を紹介しましょう

他の6ゼミの受講生同様、全員言うまでもなく意欲満々、一騎当千の兵(ツワモノ)ばかりです。自己紹介を兼ねた発表を聞くと“すげーな”の思いです。

ご覧の通り・・・

北山晴一教授と、そのかわいい教え子たちで～す♪



後期は、北山教授著「衣服は肉体に何を与えたか」に迫ります!(G)

## 話題の授業

### 立花 隆 教授

#### 「現代史の中の自分史」



#### 出身地、職歴、経歴、年齢層も異なる43人

自分史を書こうとこの講座に集まったのは86の瞳。稀代の教授がどのように導いてくださるのか、それぞれの期待が、教室中に満ち満ちていたに違いありません。

立花教授は、短期間で一気呵成に書き上げる手順を、つぎのように示されました。

- 単なるプライベートな身辺雑記的自分史ではなく、同時代史のながれの中に自分をおいて見ていく「自分史+同時代史」を目標とすること。
- 日経新聞の「私の履歴書」を手本に、「自分史年表と同時代史年表」を書くこと。

### 鈴木 理江子 教授

#### 「自分のからだと言葉を取り戻す」

#### 自分のからだを知ることから

「からだに会う」をテーマに授業がはじまりました。私たちは日ごろ、自分のからだをあらためてみつめることなどしません。無意識に呼吸をしたり、歩いたりしています。一つ一つの動作にどの様な動きが生まれ、力が加わり、筋肉が動くのかなどと考えた事ありませんでした。自分のからだなのに、何も知らず、気づかない。このめまぐるしく変化する社会のなかで、知らないうちからだに力を入れ頑張っています。そんな日々の生活の中で、この授業はからだばかりでなく、精神的にもやすらぎと楽しみを教えてくださいました。

#### からだの力を抜く心地よさ

大きく息を吸う、それをゆっくり長く吐き出す。複式呼吸はからだ熱くなり、頭のとっぺんから足の先まで血が巡りだすのを感じます。そして、手のひらや足の裏までも空気を感じることができます。

自分のからだを支えている首、手、足、からだの隅々までをいたわり語りかければ、未知の感覚が発見できるのです。無意識に力が入ってしまう、からだの力を抜く

- 「人間関係の関連図（クラスターマップ）」を書く。

#### 人生、山あり谷あり

受講生のすべてが、順調に書きすすめられるわけではありませんでした。ひとつには、「その他大勢として生きてきた者に、自分史を書く意味があるのだろうか」と立ちどまり、「我らその他大勢こそが日本の繁栄を支えてきたのだ」と気づくまでの逡巡（しゅんじゅん）のとき。

あるいは、思い出さえつらい坂をいまだ越えがたく、書き淀む時間。そしてまた、家族の中のひとりとして生きてきた自分なので、家族史として綴りたいと思う人など、理由はいろいろありました。

それを先生が受け入れ、書きたい部分をとことん書き込むように、そしてしばらく時間をおいて読み直してみると、客観的な視点からの加筆修正もできるだろうから、と自由に試行錯誤させてくださいました。

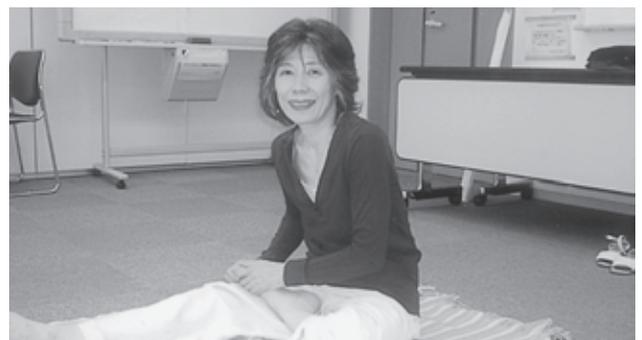
#### 自分史は、人間関係の海を泳ぎ続ける航海日誌

立花先生は毎回、徹夜にちかい時間をかけて、提出されたすべてのものに目をとおされ、90分の授業のなかで次から次へとコメントを出されるエネルギーに受講生は圧倒されました。

また、ジャーナリストとしての視点は感動的です。講義中、あるテーマについて語るときは、そこから語りたいたことが湧き出てくるように感じられました。

(U)

ことを覚えた瞬間、とても楽になり心地良くなることを知りました。死体のポーズをとりながら先生がかける声にからだのあちこちから力が抜けていく。まさしく、この時、眠りに入る誘いの言葉のようで、力を抜くことのすばらしさを実感しました。



#### 微笑みとやすらぎの授業

「何ごとか」と問いたい気持ちで臨んだ演劇のセリフの掛け合いの授業。ふだん大声を張り上げたこともない中、腹の底から声を出し、グループごとに夢中でセリフを言い合いました。なぜかみんな明るい顔をしているのを見ると、ふっと微笑んでしまいました。

これも鈴木教授の細いからだからあふれ出るパワーと人を和ませる柔らかい微笑みから、つかの間のやすらぎと楽しみを与えていただいた授業でした。

(A)

## ナシル・U・ジョマダル 先生

### 「アジアの貧困とNGO」

#### 流暢な日本語の講義

私が「アジアの貧困とNGO」を履修したのには2つの理由があります。1つは「外国人の先生がどんな授業をするのだろうか」という興味。もう1つは「国連活動」への興味です。

講義は4月16日から始まり、私は少し緊張しながら授業に臨んだのですが、まずナシル先生の流暢な日本語に驚きました。日本人でもあまり使わない難しい言葉を知っていたり、黒板に漢字を書き始めた時には本当に驚かされました。漢字をスラスラ書く外国の方は初めてです。

#### 先生の研究テーマと授業内容

先生はバングラデシュ（旧東パキスタン）出身のナイス・ミドルで、研究テーマは「アジアを中心とした世界中の貧困問題」です。特に2006年にノーベル平和賞を受賞したムハマド・ユヌス氏（グラミン銀行総裁、バングラデシュ）が実践したマイクロ・クレジット（無担保小口融資）には相当深い造詣をお持ちです。

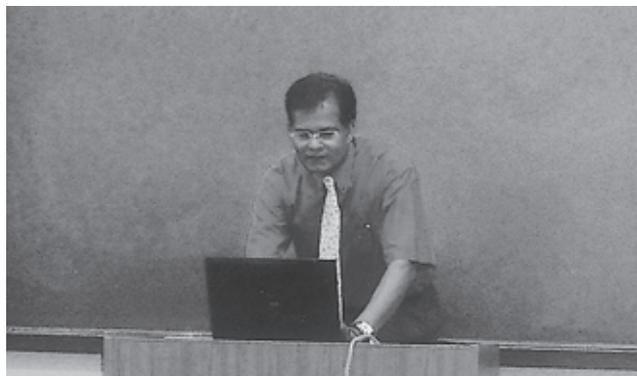
授業内容は、NGOが実施している貧困削減プログラムやプロジェクトの形成過程、計画、実施の把握とこれらが抱える諸問題の分析、貧困問題の背景と主な要因、開発援助、貧困削減の政策にまで多岐に及びました。

#### 貧困問題と教育の大切さ

授業は先生の論文をはじめ、ビデオ、写真、パワーポイント、参考書等を駆使した非常に解り易いもので、時には冗談を交え、懇切丁寧に説明をしてくださいました。

現在、世界人口約60億人の3/4にあたる45億人が発展途上国に暮らしていて、その内12億人が1日1ドル以下、20億人が1日2ドル以下の生活をしています。これらの絶対的貧困層を削減していくのが21世紀の最大の課題です。この為には、寄付に頼らず、彼らが自立できるシステムを作ることが急務だと痛感しました。

更に貧困の数多くの要因の中でも、初等教育が大切だと感じました。私達は読んだり、書いたりするのは当たり前ですが、発展途上国では識字率が非常に低く、自分の名前さえ書く事が出来ない人たちが多くいます。教育は貧困削減の基礎をなすと思います。私は何をすべきか、何ができるかを考えてみたいと思います。 (I)



## 開講科目 (2008年度)

### エイジング社会の教養科目群

- 現代世界論（前期必修）
- 超高齢社会論（後期必修）
- セカンドステージとシチズンシップ
- セカンドステージと健康長寿
- 自分のからだと言葉を取り戻す
- 現代史の中の自分史
- 英語で味わう生きる喜び
- 聖書と私
- 歴史と文化の探究
- 現代生活と地球上の森林問題
- 生命の多様性
- 地球環境の変遷と未来

### コミュニティデザインとビジネス科目群

- コミュニティデザイン入門
- NPO/NGO・ボランティア活動基礎編
- NPO/NGO・ボランティア活動応用編
- コミュニティ活動とネットワークデザイン
- セカンドステージに役立つ経済と文化

- セカンドステージとコミュニティビジネス
- セカンドステージとリーダーシップ論
- コミュニティデザイン・カフェ
- アジアの貧困とNGO
- 環境保全とコミュニティ形成（夏季集中講義）

### セカンドステージ設計科目群

- 社会老年学入門
- セカンドステージと夫婦関係・親子関係
- セカンドステージの暮らしと社会保障
- セカンドステージの住まいづくり
- 生涯現役という生き方
- 介護と看取り
- 現代の葬送と墓
- 死生観を学ぶ
- 定年後の生き方（夏季集中講義）
- 愛と癒しのコミュニオン（夏季集中講義）

### ゼミナール(必修)

受講生は必修科目を含めて通年16科目まで履修することができます。

## 立教キャンパス探訪



【 第一食堂 】



通称「一食」

外観は英国風な洒落た雰囲気、内部は温もりのある木のテーブルと木の椅子。椅子の背もたれには、さりげなく学章の“ゆりのマーク”が・・・。

立教大学では「良いものは使いながら保存する」ことをモットーに校舎を保存しています。この第一食堂は、赤レンガの校舎群にある大変きれいな食堂で、近代的ではなく、歴史の重みのある美しさがあります。光と影が織りなすコントラストが見事で、まるで教会の様です。入学後のウェルカムパーティや前期終了懇親会もここで盛大に行われました。



【 伝統のカツ丼 】

## ラウンジ風景



立教セカンドステージ大学事務室のある椿ビル4階に、受講生の交流の場としてラウンジが設けられています。机や椅子の他、パソコン、コピー機、お茶の自

動販売機、各ゼミの連絡ボックス、チラシなどの設置棚、連絡掲示板などが整備されており、毎日事務所開設時間内の9時から17時まで利用することができます。

10人程度の打ち合わせができる衝立で仕切られたミニ会議室があり、空いていればいつでも利用できます。

ゼミの打ち合わせや、各委員会の会議、授業の準備、自主企画のLuncheon meeting、友人同士の交流と活気溢れる「ラウンジ風景」が展開されています。

自主的なグルメ会やゴルフコンペなどのお知らせもあり、受講生の仲間づくりが積極的に行われていますが、昼食を食べながらのおしゃべりや、連絡事項を確認する授業前のひと時を楽しく過ごす場所として大好評です。



【 APPETITVS RATIONI OBEDIANT 】

「食欲（本来は欲望）は、理性に従うべし」

哲学者キケロの言葉

◆ラテン語の意味は・・・

含蓄のある言葉だと表現するひが多いのですが、食べること、また食べる礼儀と食べ物に対する感謝などを表す言葉と思い、この意味を感じながら、おいしいカツ丼を食しています。伝統のカツ丼は、1950年に初めて登場し、その後58年間学生に支持されている人気ナンバーワンメニューです。一杯350円なり。

是非一度ご賞味を。食べることは楽しいものです。神に感謝！

## 編集後記

創刊号の発刊にあたり、各ゼミより広報委員を選んで、広報委員会を構成し自主的にニューズレターを作成しました。各広報委員は名誉ある作業として大いに盛り上がりました。委員の中には編集作業がはじめての人が多く、編集に詳しい方がきめ細かく指導しながら、まさに新たなるコミュニティが形成されました。

また、アンケートにご協力いただいた受講生やご指導いただいた諸先生方にも改めてお礼申し上げます。

〈表紙の写真及びデザイン 山中宏一〉

【 広報委員会スタッフ 】

角川則光、柳昭正秀、伊藤喜一郎、上田理江、甘粕武子、呉東富、池田謙一、高橋雅治、赤石初枝、上江洲時子、岡崎曠敬、増田忠雄、山下由喜子、杉山徹也、山中宏一

(名簿順)

